

葛飾砂子

泉鏡花

青空文庫

縁日 柳行李 橋ぞろえ 題目船 衣の雫 浅緑
記念ながら

縁日

一

先年尾上家の養子で橘之助きつのみすけといった名題俳優やくしやが、年紀二十有五に満たず、肺を煩い、余り胸が痛いから白菊の露が飲みたいという意味の辞世の句を残して儂はかのうなり、鼻肩ひいきの人々は謂いうまでもなく、見巧者みこうしやをはじめ、芸人の仲間にも、あわれ梨園の眺め唯一の、白百合一つ菱しほんだりと、声を上げて惜しみ悼まれたほどのことである。

深川富岡門前に待乳屋まつちと謂いつて三味線屋さみせんがあり、その一人娘で菊枝という十六になるのが、秋も末方の日が暮れてから、つい近所の不動の縁日に詣まるといつて出たのが、十時半過ぎ、かれこれ十一時に近く、戸外おもての人通ひととおりもまばらになつて、まだ帰つて来なかつた。別に案ずるまでもない、同町おなじの軒並び二町ばかり洲崎すさきの方へ寄つた角に、浅草紙、束藁たわし、懐炬灰かいろほい、蚊遣香かやりこうなどの荒物、烟草たばこも封印なしの一錢五厘二錢玉、ぱいれつと、ひーろーぐらいな処を商う店がある、真中まんなかが抜裏の路地になつて合角あいかどに格子戸造づくりの仕舞家しもたやが

一軒。

江崎とみ、と女名前、何でも持つて来いという意気造だけれども、この門札は、さる類の者の看板ではない、とみというのは方違いの北の廓、京町とやらのさる楼に、博多の男帯を後から廻して、前で挟んで、ちよこなんと坐つて抜衣紋で、客の懐中を上目で見るいわゆる新造なるもので。

三十の時から二階三階を押廻して、五十七の今年二十六年の間、遊女八人の身拔をさしたと大意張の腕だから、家作などはわがものにして、三月ばかり前までは、出稼の留守を勤め上りの困物、これは洲崎に居た年増に貸してあつたが、その婦人は、この夏、弁天町の中通に一軒引手茶屋の売物があつて、買つてもらい、商売をはじめたので空家になり、また貸札でも出そうかという処へ娘のお縫。母親の富とは大違いな殊勝な心懸、自分の望みで大学病院で仕上げ、今では町住居の看護婦、身綺麗で、容色も佳くつて、ものが出来て、深切で、優しいので、寸暇のない処を、近ごろかの尾上家に頼まれて、橘之助の病蓐に附添つて、息を引き取るまで世話をしたが、多分の礼も手に入る、山そだちは山とか、ちと看病疲も出たので、しばらく保養をすることにして帰つて来て、ちようど留守へ入つて独で居る。菊枝は前の困者が居た時分から、縁あつてちよいち

よい遊びに行つたが、今のお縫になつても相変らず、……きつとだと、両親ふたおやが指図で、小僧兼内弟子の弥吉やきちというのを迎むかひに出すことにした。

「菊枝きくえが毎度出ましてお邪魔様でございませう、難ありがと有う存じます。それから菊枝に、病氣揚句よきかだ、夜更よふかしをしては宜よくないからお帰りと、こう言うのだ。汝てめえまたかりん糖こわいろの仮色かいろを使つて口上を忘れるな。」

坐睡いねむりをしていたのか、寝惚ねぼけづら面めんで承るとむつくと立ち、おつと合点お茶の子で飛出した。

わつしよいわつしよいと謂いう内に駆けつけて、

「今晚は。」という江崎が家の格子戸をがらりと開けて、

「今晚は。」

時に返事をしなかつた、上あがり櫃がまちの障子は一枚左の方へ開けてある。取附とつつきが三畳、次の間に灯あかりは点ついていた、弥吉は土間の処へ突つ立つて、委細わいさい構かまわず、

「へい毎度出ましてお邪魔様でございませう、難ありがと有う存じます。ええ、菊枝さん、姉さん。」

「菊枝さん、」とまた呼んだが、誰も返事をするものがない。

立続けに、

「遅いからもうお帰りなさいまし、風邪を引くと不可ません。」

弥吉は親方の吩咐いいつけに註を入れて、我ながら旨うまく言つたと思つたが、それでもなおお応じないから、土間の薄暗い中をきよるきよるとみまわしたが、密そつと、框かまちに手をつけて、
及および腰こしに、高慢な顔色かおつきで内を透すかし、

「かりん糖でござい、評判のかりん糖！」と節をつけて、

「雨が降つてもかりかりツ、」

どんなものだ、これならば顕あらわれよう、弥吉は菊枝とお縫とが居ない振ふりでかつぐのだと思
うから、笑い出すか、噴はなき出すか、くすくす遣やるか、叱のたまるか、ニヤニヤ独ひとりで笑いながら、
耳みみを澄すましたけれども沙汰さたがない、時計の音が一分ずつ柱を刻うち、潮うしおの退ひくように鉄瓶てつびんの
沸にえ止やむ響ひびき、心着こころけば人ひと気勢けいせいがしないのである。

「可笑おかしいな、」と独ひとりごと言ことをしたが、念晴ねんせいしにもう一ツ喚わめいてみた。

「へい、かりん糖でござい。」

それでも寂^{ひっそり}寞^{あかり}、気のせいか灯も陰気らしく、立つてる土間は暗いから、嚏^{くさめ}を仕損なつたような変な目色^{めつき}で弥吉は飛込んだ時とは打つて変り、ちと悄気^{しよげ}た形で格子戸を出たが、後を閉めもせず、そのままには帰らないで、溝伝いにちようど戸外^{おもて}に向つた六畳の出窓の前へ来て、背後^{うしろむき}向^よに倚りかかつて、前後^{あどさき}を^{みまわ}して、ぼんやりする。

がらがらと通つたのは三台ばかりの威勢の可^よい腕車^{くぐるま}、中に合^{あいのり}乗^{のり}が一台。

「ええ、驚かしやあがるな。」と年紀^{とし}には肖^にない口を利いて、大福餅^{ふとこ}が食べたそうに懐^{ふとこ}中^ろに手を入れて、貧乏ゆるぎというのを行^やる。

処へ入乱れて三四人の登^{あしおと}音、声高^{あしおと}にものを言い合いながら、早足^{ちかづ}で近^{ちかづ}いて、江崎の前へ来るとちよつと淀^{よど}み、

「どうもお嬢^{ありがと}さん難^{ありがと}有^あうございしました。」こういったのは豆腐屋^{かみさん}の女房^{かみさん}で、

「飛んだお手数^あでしたね。」

「お蔭^{とめ}様だ。」と留^{とめ}という紺屋^{うおかん}の職人^{おやじ}が居る、魚勘^{うおかん}の親仁^{おやじ}が居る、いずれも口々。

中^{はさま}に挟^{はさま}つたのが看護婦^{はさま}のお縫^{はさま}で、

「どういたしまして、誰^{どなた}方も御苦^{どなた}勞^{どなた}様、御免^{どなた}なさいまし。」

「さようなら。」

「お休み。」

互に言葉^{かわ}を交したが、連^{つれ}の三人はそれなり分れた。

ちよつと^{たたず}いで見送るがごとくにする、お縫は^{しまもの}縞物の不断着に帯をお太鼓にちやんと結んで、白足袋^はを穿いているさえあるに、髪が^{やかいむすび}夜会結。一体ちよん^{まげ}鬘より夏冬の帽子に目を着けるほどの、土地柄に珍しい^{なり}扮装であるから、新造の娘とは知っていても、^{とな}称えるにお嬢様をもつてする。

お縫は出窓の処に立っている弥吉には目もくれず、^{くびす}踵を返すと何か^{せわ}忙しらしく入ろうとしたが、格子も障子も突^{あけ}抜けに開ツ放し。思^{ためら}わず猶予つて振返つた。

「お帰んなさい。」

「おや、待乳屋さんの、」と唐^{だしぬけ}突に驚く間もあらせず、

「菊枝さんはどうしました。」

「お帰んなすつたんですか。」

いささか見当が違っている。

「病氣揚句だしもうお帰んなさいって、へい、迎いに来たんで。」

「どうかなさいましたか。」と深切なものいいで、門口かどぐちに立って尋ねるのである。小僧は息をはずませて、

「一所に出懸けたんじやあないの。」

「いいえ。」

柳行李

三

「へい、おかしいな、だつて内にやあ居ませんぜ。」

「なに居ないことがありますか、かつがれたんでしよう、呼んで見たのかね。」

「呼びました、喚わめいたんで、かりん糖の仮こわいろ声まで使ったんだけれど。」

お縫は莞爾にっこりして、

「そんな串じょうだん戲げをするから返事をしないんだよ。まあお入んなさい、御苦勞様でした。」

と落着いて格子戸を潜つたが、土間を透すと緋の天鵝絨の緒の、小町下駄を揃えて脱いであるのに屹と目を着け、

「御覽、履物があるじやあないか、何を慌ててるんだね。」

弥吉は後について首を突込み、

「や、そいつあ気がつかなくったい。」

「今日はね河岸へ大層着いたそうで、鮪の鮮しいのがあるからお好きな赤いのをと思つて菊ちゃんを一人ぼっちにして、角の喜の字へ行くとね、帰りがけにお前、」と口早に話しながら、お縫は上^{あがり}框^{がま}の敷居の処でちよつと屈み、件の履物を揃えて、

「何なんですよ、蘆の湯の前まで来ると大勢立つてるんでしよう、恐しく騒いでるから聞いてみると、銀次さん許の、あの、刺青^{ほりもの}をしてお婆さんが湯気に上つたというものですから、世話をしてね、どうもお待遠様でした。」

と、襖を開けてその六畳へ入ると誰も居ない、お縫は少しも怪しむ色なく、

「堪忍して下さい。だもんですから、」ずつと、長火鉢の前を悠々と斜に過ぎ、帯の間へ手を突込むと小さな蝦蟇口を出して、ちやらちやらと箆筒の上に置いた。門口の方を透

して、

「小僧さん、まあお上り、菊枝さん、きいちゃん。」と言って部屋の内をみまわすと、ぼんぼん時計、花瓶の菊、置床の上の雑誌、貸本が二三冊、それから自分の身体からだが箆笥の前にあるばかり。

はじめて怪訝おかしな顔をした。

「おや、きいちゃん。」

「居やあしねえや。」と弥吉は腹ばい這ひになつて、覗のぞいている。

「弥吉どん。本当に居ないですか、菊ちゃん。」とお縫よりは箆笥かかに凭よ懸りつたまま、少し身を引いて三寸ばかり開あいている襖ふすま、寝間ねまにしておく隣の長四畳ながのその襖ふすまに手を懸かけたが、ここに見えなければいよいよ菊枝きくぢが居いないのに極きまるのだと思うから、気がさしたと覚おぼしく、猶なほ予らつて、腰こしを据すえて、筋すぢの緊しつて来る真顔まへは淋しみしく、お縫よりは大事だいじを取る塩梅あんばいに密そつと押開おけると、ただ中ちゆう古この畳畳なり。

「あれ、」といいさまつかつかと入あつたが、慌あわただしく、小僧こぞうを呼よんだ。

「おつ、」と答こえて弥吉やきちは突いき然なり飛と込んで、

「どう、どう。」

「お待ちなさいよ、いえね、弥吉どん、お前まへ来る途みちで逢あい違ちがいはしないだろうね、履物履物は

あるし、それにしちやあ、」

呼び上げておきながら取留めたことを尋ねるまでもなく、お縫は半ばひとりごと独言。蓋ふたのあいた柳行李やなぎこしりの前に立膝になり、ちよつと小首を傾けて、向うへ押して、ころりと、仰向けに蓋を取つて、右手を差入れて底の方から擡もたげてみて、その手を返して、畳んだ着物を上から二ツ三ツおさ圧えてみた。

「お嬢さん、盗賊どろぼう？」と弥吉は耐たまりかねて頓とんきよう興な声を出す。

「待つて頂戴。」

お縫は自らおのが身を待たして、蓋を引いたままじつとして勝手許かってもとに閉しまっている一枚の障子を、その情の深い目で瞋みづめたのである。

四

「弥吉どん。」

「へい、」

「おいで、」と言うや否や、ずいと立つて件くだんの台所だいどころの隔ての障子。

柱に掴つて覗いたから、どこへおいでることやらと、弥吉はうろろする内に、お縫は裾を打つて、ばたばたと例の六畳へ取つて返した。

両三度あちらこちら、ものに手を触れて廻つたが、台洋燈を手に取るとやがてまた台所。

その袂に触れ、手に触り、寄つたり、放れたり、筋違に退いたり、背後へ出たり、附いて廻つて弥吉は、きよろきよろ、目ばかり煌かして黙然で。

お縫は額さきに洋燈を捧げ、血が騒ぐか細おもての顔を赤うしながら、お太鼓の帯の幅つたげに、後姿で、すつと台所へ入つた。

と思うと、湿ツけのする冷い風が、颯と入り、洋燈の炎尖が下伏になつて、ちらりと蒼く消えようとする。

はつと袖で囲つてお縫は屋根裏を仰ぐと、引窓が開いていたので、煤で真黒な壁へ二条引いた白い繩を、ぐいと手繰ると、かたり。

引窓の閉まる拍子に、物音もせず、五分ばかりの丸い灯は、口金から根こそぎ殺いで取つたように火屋の外へふツとなくなる。

「厭だ、消しちまつた。」

勝手口は見通しで、二十日に近い路地の月夜、どうしたろう、ここの戸は閉しまつておらず、右に三軒、左に二軒、両側の長屋はもう夜中で、明あかるい屋根あり、暗い軒あり、影は溝どぶ板いたの処々、その家もここも寂ひっそり寞して、ただ一つ朗かな蚯みみず蚓の声が月でも聞くと思ふのか、鳴なっている。

この裏を行ゆきぬ抜ぬけの正面、霧の綾あやも遮らず目の届く処に角が立った青いものの散ちらつたのは、一軒飛離れて海苔粗朶のりそだの垣を小さく結つた小屋で剥むく貝の殻で、その剥むき身屋みのうしろに、薄霧のかかった中は、直ちに汽船の通う川である。

ものの景色はこれのみならず、間近な軒のこつちから棹さおを渡して、看護婦が着る真ま白しろな上衣うわぎが二枚、しまい忘れたのが夜干よぼしになつて懸かかつていた。

「お化ばけ。」

「ああ、」とばかり、お縫は胸のあたりへ颯さつと月を浴びて、さし入る影のきれぎれな板敷の上へ坐つてしまうと、

「灯あかりを消しましたね。」とお化ばけの暢のんき気さ。

橋ぞろえ

五

「さあ、おい、起きないか起きないか、石見橋はもう越した、不動様の前あたりだよ、直に八幡様だ。」と、縞の羽織で鳥打を冠つたのが、胴の間に円くなって寝ている黒の紋着を揺り起す。

一行三人の乗合で端に一人仰向けになつて舷に肱を懸けたのが調子低く、

と口吟んだ
つくだ
佃々と急いで漕げば、

潮がそこりて艀が立たぬ。

と口吟んだ。

けれども実際この船は佃をさして漕ぐのではない。且つ潮がそこるところの沙汰ではない。昼過からがらりと晴上つて、蛇の目の傘を乾かすような月夜になつたが、昨夜から今朝へかけて暴風雨があつたので、大川は八分の出水、当深川の川筋は、縦横曲折する処、潮、満々と湛えている、そして早船乗の頬冠をした船頭は、かかる夜のひっそりし

た水に声を立てて艫をぎいーぎい。

砂利船、材木船、泥船などをひしひしと纏もやつてある 蛤はまぐり 町ちようの河岸を過ぎて、左手に黒い板囲い、㊦※と大きく胡粉ごこんで書いた、中空に見上げるような物置の並んだ前を通つて、蓬萊橋ほうらいばしというのに懸かつた。

月影に色ある水は橋はし杭くわいを巻いてちらちらと、畝うねつて、横堀に浸した数十本の材木が皆動く。

「とつさんここいらで、よく釣つてるが何が釣れる。」

船顎、

「沙魚はぜに鱒子おぼこが釣れます。」

「おぼこならば釣れよう。」と縞の羽織が笑うと、舷に肱をついたのが向直つて、

「何あてになるものか。」

「遣やつて御覧ごらんじろ。」と橋の下を抜けると、たちまち川幅が広くなり、土手が著しく低くなつて、一杯の潮は凸なかだかあふに溢れるよう。左手ゆんでは洲すの岬みさきの蘆あし原はらまで一望びよう渺ひろうたる広場、船大工の小屋が飛とび々とび、離々たる原上の秋の草。風が海手からまともに吹きあてるので、満潮の河心へ乗つてるような船はここにおいて大分揺れる。

「釣れる段か、こんな晩にやあ鰻が船の上を渡り越すというくらいな川じゃ。」と船頭は意気頗る昂る。

「さあ、心細いぞ。」

「一体この川は何という。」

「名はねえよ。」

「何とかありそうなものだ。」

「石見橋なら石見橋、蓬萊橋なら蓬萊橋、蛤町の河岸なら蛤河岸さ、八幡前、不動前、これが富岡門前の裏になります。」という時、小曲をして平清の植込の下なる暗い処へ入って蔭になった。川面はますます明い、船こそ数多あるけれども動いているのはこの川にこれただ一艘。

「こつちの橋は。」

間近く虹のごとく懸っているのを縞の羽織が聞くと、船頭の答えるまでもなく紋着が、

「汐見橋。」

「寂しいな。」

この処の角にして船が弓なりに曲つた。寝息も聞えぬ小家あまた、水に臨んだ岸にひよ

ろひよろとした細くつて低い柳があたかも墓へ手向けたもののように果敢なく植わっている。土手は一面の蘆で、折しも風立つて来たから颯と靡き、颯と靡き、颯と靡く反対の方へ漕いで漕いで進んだが、白珊瑚の枝に似た貝殻だらけの海苔粗朶が堆く棄ててあるのに、根を隠して、薄ら蒼い一基の石碑が、手の届きそうな処に人の背よりも高い。

六

「おお、気味悪い。」と舷を左へ坐りかわった縞の羽織は大いに悄気る。

「とつさん、何だろう。」

「これかね、寛政子年の津浪に死骸の固っていた処だ。」

正面に、

葛飾郡 永代築地

と鐫りつけ、おもてから背後へ草書をまわして、

此処 寛政三年波あれの時、家流れ人死するもの少からず、此の後高波の変はかりがたく、溺死の難なしというべからず、是に寄りて西入船町を限り、東吉祥寺前に至るまで

凡そ長さ二百八十間余の所、家居取払い空地となし置くものなり。

と記して傍に、寛政六年 甲寅十二月 日とある石の記念碑である。

「ほう、水死人の、そうか、謂わば土左衛門塚。」

「おつと船中にてさようなことを、」と鳥打はつむりを縮めて、

「やー！」

響くは凄じい水の音、神川橋の下を潜つて水門を抜けて矢を射るごとく海に注ぐ流の声なり。

「念入だ、恐しい。」と言いながら、寝返の足で船底を蹴ったばかりで、未だに生死のほども覚束ないほど寝込んでいる連の男をこの際、十万の味方と烈しく揺動かして、

「起きないか起きないか、酷く身に染みて寒くなった。」

やがて平野橋、一本二本蘆の中に交つたのが次第に洲崎のこの辺土手は一面の薄

原、穂の中から二十日近くの月を遠く沖合の空に眺めて、潮が高いから、人家の座敷下の手すりとすれずれの処をゆらりと漕いだ、河岸についてるのは川蒸気で縦に七艘ばかり。

「ここでも人ツ子を見ないわ。」

「それでもちつとは娑婆しやばらしくなった。」

「娑婆しやばといやあ、とつさん、この辺で未通子おほこはどうだ。」と縞の先生いきかえ活返いきかえつていやごとを謂う。

「どうだどころか、もしお前まへさん方、この加賀屋かがやじゃ水から飛込うおむ魚を食くべさせるとつて名代なだいだよ。」

「まずそこから可よし、船がぐらぐらと来て鰻うなぎの川渡りかわわたりは御免蒙ごうむる。」

「ここでは欄干てすりから這はい込みます。」

「まさか。」

「いや何ともいえない、青山辺あやまじやあ三階さんかいへ栗くりが飛込うたむぜ。」

「大出来！」

船頭ふねづかも哄どっと笑い、また、

佃いん々と急いそいで漕こげば、

潮うしほがそこりて艀ふねが立たぬ。

程なく漕こぎ寄せたのは弁天橋べんてんばしであった、船頭ふねづかは舳へさきへ乗のりかえ、棹さおを引ひいて横よこづけにする、水は船底ふねぞこを嘗なめるようにさらさらと引ひいて石垣いしがきへだぶり。

「当りますよ。」

「活きてるか、これ、」

二度まで揺られても人心地のないようだった一名は、この時わけもなくむつくと起きて、真先に船から出たのである。

「待て、」といいつつ兩人、懐をおさえ、褌を合わせ、羽織の紐を〆《し》めなどして、履物を穿いてばたばたと陸へ上つて、一団になると三人言い合せたように、

「寒い。」

「お静に。」といって、船頭は何か取ろうとして胴の間の処へ俯向く。

途端であつた。

耳許にドンと一発、船頭も驚いてしやつきり立つと、目の前へ、火花が糸を引いて※と散つて、川面で消えたのが二ツ三ツ、不意に南京花火を揚げたのは寝ていたかの男である。

斉しく左右へ退いて、呆氣に取られた連の兩人を顧みて、呵々と笑つてものをもいわず、真先に立つて、

鞭声肅々——

題目船

七

「何じやい。」と打棄うっちゃつたように忌々いまいましげに眩つぶやいて、頬ほお冠かぶりを取つて苦にが笑わらいをした、船頭は年紀六十ばかり、瘦やせて目鼻に廉かどはあるが、一癖も、二癖も、額まなじり、眦くちもと、口許くちもとの皺しわに隠れてしおらしい、胡麻塩ごましおの元はげ頭あたま、見るから仏になつてゐるのは佃町のはずれにひとりひとりずまい、独住居ひとりずまいの、七兵衛という親仁おやしである。

七兵衛——この船頭ばかりは、仕事の了しまいにも早船をここへ繋つないで戻りはせぬ。

毎夜、弁天橋へ最後の船を着けると、後へ引返ひっかえしてかの石碑の前を漕こいで、蓬萊橋まで行つてその岸の松の木に纜もやつておいて上あがるのが例ならいで、風雨の烈はげしい晩、休む時はさし措おき、年月夜としづみごとにきつとである。

且つ仕舞船を漕ぎ戻すに当つては名代の信者、法華経第十六寿量品じゆりようほんの偈げ、自我得じがとく

仏来ぶつらいというはじめから、速成就そくじょうじゆぶつしん 仏身ぶつしんとあるまでを幾度いくたびとなく繰返す。連夜の川か施餓鬼わせたがきは、善か悪か因縁いん縁があるうと、この辺では噂うわさをするが、十年は一昔、二昔も前から七兵衛を知つてるものも別に仔細しさいというほどのことを見出さない。本人も語らず、またかかる善根功德、人が咎とがめるところの沙汰さたではない、もとより起居に念仏を唱える者さえある、船で題目を念ずるに仔細は無からう。

されば今宵こよひも例に依つて、船の舳へさきを乗返した。

腰を捻ひねつて、艣柄ろづかを取つて、一ツおすと、岸を放れ、

「ああ、良い月だ、妙法蓮華經みょうほうれんげき如来にょらい 寿量品第十六自我得仏来、所經諸劫数しよきようしよごうすう、無量百千万億載阿僧祇むりやうひやくせんまんおくさいあそうぎ、」と誦じゆしはじめた。風も静しずかに川波の声も聞えず、更け行くにつれて、三押みおしに一度、七押に一度、ともすれば響く艣の音かな。

「常説法教化無数億衆生爾来無量劫。」

法の声は、蘆あしを渡り、柳に音ずれ、蟋蟀きりぎりすの鳴き細る人の枕に近づくのである。

本所ならば七不思議の一ツに数えよう、月夜の題目船だいもくぶね、一人船頭。界限かいわいの人々はそもいかんの感を起す。苦家とまや、伏家ふせやに灯の影も漏れない夜よはさこそ、朝々の煙も細くかの柳を手向けられた墓のごとき屋根の下には、子なき親、夫なき妻、乳のない嬰兒みどりご、盲目めくらの

媼おつな、継母よりの、寄合あひしん身上しんしやうで女ばかりで暮すなど、哀あわれに果敢はかない老若男女ろうにやくなんによが、見る夢も
 覚めた思いも、大方この日が照る世の中のことではあるまい。

髻ひげある者、腕車くるまを走らす者、外套がいとうを着たものなどを、同一世おなじに住むとは思わず、同はら胞らであることなどは忘れてしまつて、憂うれきことを、憂うれしと識別することさえ出来ぬまで

心身ともに疲れ果てたその家この家に、かくまでに尊い音楽はないのである。

「衆生しゆじやう既信きしん伏質ふくしち直意ちきい柔軟ゆわなん、一心いつしん欲見よくけん仏ぶつ、不自惜ふじやく身命しんみやう、」と親仁は月下に

小船せうせんを操る。

諸君が随処ずいじょ、淡路島通う千鳥の恋の辻つじ占うらというのを聞かせる時、七兵衛の船は石碑の
 ある処かかへ懸かつた。

いかなる人がこういう時、この声を聞くのであるか？ ここに適例がある、富岡門前町
 のかのお縫ぬいが、世話をしたというから、菊枝のことについて記すのにちつとも縁がないの
 ではない。

幕府の時分旗本であつた人の女むすめで、とある楼うちに身を沈めたのが、この近所に長屋を持た
 せ廓くわく近くへ引取つて、病身な母親と、長煩いで腰の立たぬ父親とを貢いでいるのがあつた。

八

少なからぬ借金で差引かれるのが多いのに、稼かせぎ高たかの中から渡される小遣こづかいは髪結かみゆいの祝儀にも足りない、ところを、たといお湯にしろ両親が口を開けてその日その日の仕し送おくりを待つのであるから、一月と纏まとめてわずかばかりの額ではないので、毎々借越かりこしにのみなるのであったが、暖簾名のれんなの婦人おんなと肩を並べるほど売れるので、内証にくで悪い顔もしないで無心に応じてはいたけれども、応ずるは売れるからで、売るのには身をもつて勤めねばならないとか。

いかに孝女でも悪所において斟しんしゃく酌しんぞがあろうか、段々身体からだを衰えさして、年とし紀はまだ二十二というのに全盛の色もやや褪あせて、素顔では、と源平の輩やからに遠慮えんりょをするようになると、二度三度、月の内に枕が上らない日があるようになった。

扱帯しごきの下を氷で冷すばかりの容体を、新造しんぞが枕まくら頭もとに取詰めて、このくらいなことでも半日でも客を断るといふことがありますか、死んだ浮舟なんぞ、手拭てぬぐいで汗を拭ふく度に肉が殺そげて目に見えて手足が細くなつた、それさえ我儘をさしちやあおきませなんだ、貴女は御全盛のお庇かげに、と小刀針こがたなはりで自分が使う新造しんぞにまでかかることを言われながら、これ

にはまた立替えさしたのが、控帳についてるので、悔しい口も返されない。

という中にも、随分気の確たしかな女、むずかしく謂いえば意志が強いという質たちで、泣かないが蒼あおくなる風だったそうだから、辛抱はするようなもの、手元が詰つまるに従したがうて謂いうまじき無心の一つもいうようになると、さあ鱒とじょうにけは遁うなぎすべる、鰻うなぎははる、お玉杓たまじやくし子は吃驚びつくりする。

河岸は不漁しけで、香のある鯛たいなんざ、廓さとまでは廻まわらぬから、次第々々に隙ひまにはなる、融通は利かず、寒くはなる、また暑くはなる、年紀としは取る、手拭は染めねばならず、夜具の皮は買わねばならず、裏は天地で間に合つても、裌しかけ襦じゆの色は変えねばならず、茶は切れる、時計は留とまる、小間物屋は朝から来る、朋輩ひやくは落籍ひやくがある、内証こどもでは小児こどもが死ぬ、書記の内へ水がつく、幫たいこもち間まがはな会あひをやる、相撲が近所で興行する、それ目録しきだわ、つかいものだ、見舞だと、つきあいの雑用ぞうようを取るだけでも、痛む腹のいいわけは出来ない仕誼しぎ。随分それまでもかれこれと年季を増して、二年あまりの地獄くわらしみの苦くるしみがフイになっている上へ、もう切迫せつぱと二十円。

盆のことで、両親の小屋へ持つて行つて、ものをいう前にまず、お水ひやを一口という息いきぎ切れのする女むすめが、とても不可いけません、濟すまないこッつすがせめてお一人だけならばと、張はりも意気地もなく母親の帯につかまつて、別際わかれぎわに忍泣しのびなきに泣いたのを、寝ていると思つ

た父親が聞き取つて、女が帰つて明るる日も待たず自殺した。

報知しらせを聞くと齊ひとしく、女は顔の色が變つて目が窪くぼんだ、それなりけり。砂利へ寝かされるような蒲団ふとんに倒れて、乳房の下に骨が見える煩い方。

肺病のある上へ、驚いたがきつかけとなつて心臓を痛めたと、医者いしやが匙さじを投げてから内証は証文を卷いた、但し身附の衣類諸道具は編笠あみがさ一蓋いっがいと名づけてこれをぶったくり。

手当も出来ないで、ただ川のへりの長屋に、それでも日の目が拝めると、北枕に水の方へ黒髪を乱して倒れている、かかる者の夜更けて船頭の誂経を聞くのは、どんなに悲しかろう、果敢はかなからう、情なさけなからう、また嬉しかろう。

「妙法蓮華経如来寿量品第十六自我得仏来所経諸劫数無量百千万億載阿僧祇。」と誦じゆするのが、いうべからざる一種の福音を川面かわづらに伝えて渡つた、七兵衛の船は七兵衛が乗つて漂々然。

九

蓬萊橋は早や見える、折から月に薄雲がかかったので、野も川も、船頭と船とを淡く残

して一面に白み渡った、水の色は殊にやや濁(にごり)を帯びたが、果(はて)もなく洋々として大河のごとく、七兵衛はさながら棲(せいそく)息して呼吸するものがない、月世界の海を渡るに斉(ひと)しい。

「妙法蓮華經如来寿量品。」と繰返したが、聞くものの魂(ふなばた)が舷(ふなばた)のあたりにさまようようなものの怪(けまつわ)が絡(ま)つたか。鳥が二声ばかり啼(な)いて通った。七兵衛は空を仰いで、

「曇(とん)つて来た、雨返しがありそうだな、自我得仏来所經、」となだらかにまた頓(とんじやく)着(やく)しない、すべてのものを忘れたという音調で誦(じゆ)するのである。

船は水面を横に波状動を起して、急に烈(はげ)しく揺れた。

読經をはたと留め、

「やあ、やあ、かしが、」と眩(つぶや)きざま艫(とも)を左へ漕(こ)ぎ開くと、二(ふた)条糸(すじ)を引いて斜(ななめ)に描(な)かれたのは電(いなづま)の裾(すそ)に似たる綾(あや)である。

七兵衛は腰(た)を撓(た)めて、突(つ)立(た)つて、逸(いち)疾(は)く一間(い)ばかり遣(やり)違(ちが)えに川下へ流したのを、振返(か)つてじつと瞋(みづ)め、

「お客様(おきやく)だぜ、待(まち)て、妙法蓮華經如来寿量品第十六。」と忙(せわ)しく張(た)上げて念(ねん)じながら、舳(へ)を輪(わ)なりに迂(すべ)らして中流で逆に戻して、一息ぐいと入(い)れると、小波(こさ)を打乱(う)す薄月(はくげつ)に影(かげ)あるものが近(ちか)いて、やがて舷(へ)にすれすれになった。

飛下りて、胴の間に膝をついて、白髪天頭しろがあたまを左右に振ったが、突然いきなり水中へ手を入れると、朦朧もろうろとして白く、人の寝姿に水の懸かかつたのが、一揺静ゆれずかに揺れて、落着いて二三尺離れて流れる、途端に思うさま半身を乗出したので反対の側なる舷へざぶりと一ひとなみあび波浴せたが、あわよく手先がかかったから、船は人とともに寄つて死骸に密接することになった。無意識に今掴つかんだのは、ちようど折曲げた真白まっしろの舷ひじの、鍵形かぎなりに曲つた処だったので、「しやつちこぼつたな、こいつあ日なしだ。」

とそのまま乱暴に引上げようとすると、少しく水を放れたのが、柔かに伸びそうな手てじた答えがあつた。

「どっこい。」驚いて猿臂えんびを伸のばし、親仁おやしは仰向あおもむいて鼻筋しなに皺しわを寄せつつ、首尾よく肩のあたりへ押廻して、手を潜くぐらし、搔かい込んで、ずぶずぶと流ながれを切つて引上げると、びつしやり舷へ胸をのせて、俯向うつむけになつたのは、形も崩れぬ美しい結綿ゆいわたの島田鬘まげ。身を投げて程も無いか、花がけにした鹿かの子の切きれも、沙魚はぜの口へ啣くはえ去られないで、解ほどけて頸うなじから頬の処へ、血が流れたようにベツとりとついている。

親仁は流に攫さらわれまいと、両手で、その死体の半なかばはいまだ水に漂っているのをしっかりと押えながら、わなわなと震えて早口に経を唱えた。

けれどもこれは恐れたのでも驚いたのでもなかつたのである。助かるすべもありそうなら、見た処の一枝の花を、いざ船に載せて見て、咽喉のどを突かれてでも、居はしまいか、鳩尾みずおちに斬きつたあとでもあるまいか、ふと愛惜あいじやくの念盛さかんに、望のぞみの糸いとに縋すがりついたから、危あぶんで、七兵衛は胸とどろが轟とどろいて、慈悲じの外何とどろの色をも交えぬ老おいの眼まなこは塞ふさいだ。

またもや念ねんずる法華經ほつふしの偈げの一節ひとふし。

やがて曇曇つた夜のにえ色いろを浴ゆびながら満水まんすいして濁濁つた川かわは、どんと船ふねを突つ上げたばかりで、忘わすれたようにその儀にえを七兵衛しちべゑの手に残のこして、何事なにごともなく流れ流ながるる。

衣の雫

十

待乳屋まちちちの娘菊枝むすめきくぎは、不動ふどうの縁日えんじつにといつて内うちを出でた時とき、沢山さわやまある髪かみを結ゆい綿わたに結むすつていた、角つの絞しぼりの鹿かの子この切きれ、浅葱あさぎと赤あかと二筋ふたぢんを花はながけにしてこれが昼過ひる過ぎぎに出来できたので、

衣服は薄お納戸の棒縞糸織の袷、薄紫の裾廻し、唐繻子の襟を掛けて、赤地に白菊の半襟、緋鹿の子の腰巻、朱鷺色の扱帯をきりきりと巻いて、萌黄繻子と緋の板じめ縮緬を打合せの帯、結目を小さく、心を入れないで帯上は赤の菊五郎格子、帯留も赤と紫との打交ぜ、素足に小町下駄を穿いてからからと家を。

一体三味線屋で、家業柄出入るものにつけても、両親は派手好なり、殊に鼻唄俳優の橘之助の死んだことを聞いてから、始終よくよとして、しばらく煩ってまでいたのが、その日は誕生日で、気分も平日になく好いというので、髪も結って一枚着換えて出たのであった。

小町下駄は、お縫が許の上櫃の内に脱いだままで居なくなつたのであるから、身を投げた時は跣足であつた。

履物が無かつたばかり、髪も壊れず七兵衛が船に助けられて、夜があけると、その扱帯もその帯留も、お納戸の袷も、萌黄と緋の板締の帯も、荒縄に色を乱して、一つも残らず、七兵衛が台所にずらりと懸つて未だ雫も留まらないで、引窓から朝霧の立ち籠む中に、しとしと落ちて、一面に朽ちた板敷を濡しているのは潮の名残。

可惜、鼓のしらべの緒にでも干す事か、縄をもって一方から引窓の紐にかけ渡したのは

無慙むげんであるが、親仁おやしが心は優やさしかった。

引窓ひまどを開けたばかりわざと勝手の戸も開けず、門かどぐち口も閉めたままで、鍋なべをかけた七輪ななりんの下を煽あおきながら、大入こよみだの、曆こよみだの、姉さんだのを張交まくらびぜにした二枚折ふたまいせの枕屏風まくらびょうぶの中を横から振向のぞいて覗き込み、

「姉ねえや、気分はどうじゃの、少し何かわかが解わかつて来たか、」

と的ま面にこつちを向まいて、眉まゆの優やさしい生はえ際ぎわの濃こい、鼻筋はなぢの通とつたのが、何も思おもわないうような、しかも限かぎりなき思おもいを籠かごめた鈴すずのような目を瞠みはつて、瓜核形うりぎねなりの顔かほばかり出して寝ねているのを視ながめて、大口おほくちを開あいて、

「あはは、あんな顔かほをして罪つみのない、まだ夢ゆめじゃと思おもうそうだ。」

菊枝きくえだは、硫黄いおうヶ島の若布わかめのごとき檻樓蒲団ぼろぶとんにくるまって、拔綿ぬきわたの丸まるげたのを枕まくらにしている、これさえじかづけであるのに、親仁おやしが水みづでも吐はかしたせいせいか、船ふねへ上げられた時ときよりは髪かみがひつ潰つぶれて、今いまもびつしよりあわれで哀あわれである、昨夜ゆうべはこの雫しずくの垂たるる下したで、死際しぎわの蟋きりぎりす蟀りすが鳴ないでいた。

七兵衛しちべゑはなおしおらしい目めから笑えみを溢こぼして、

「やれやれ綺麗きれいな姉あねさんが台たいなしになつたぞ。あてこともねえ、どうじゃ、切きないかい、

どこぞ痛みはせぬか、お肚なかは苦しゆうないか。」と自分の胸を頑固な握にぎりこぶし拳こぶしでこツこツと叩いて見せる。

ト可愛らしく、口を結んだまま、ようようこの時頭かぶりを振った。

「は、は、痛かあない、宜いいな、嬉よしいな、可よし、可よし、そりやこうじやて。お前めえ、飛込めえんだ拍子いきなりに突いきなり然いきなり目でも廻まわしたか、いや、水も少しばかり、井に一杯吐いたか吐かぬじゃ。大したことはねえての、気たしかさえ確たしかになれば整然ちやんと治る。それからの、ここは大事な処じじや、婆ばばも猫も犬も居おらぬ、私わし一人じやから安心をさっしやい。またどんな仔細しさいがないとも限らぬが、少しも気遣きつかいはない、無理に助けられたと思うと気が揉もめるわ、自然天然と活い返きかえったところするだ。可いいか、活返きかえったら夢と思つて、目が覚めたら、」といいかけて、品のある涼しい目をまた凝視みつめ、

「これさ、もう夜があけたから夢ではない。」

十一

しばらくして菊枝が細い声、

「もし」

「や、産声うぶごゑを挙げたわ、さあ、安産、安産。」と嬉しそうに乗出して膝を叩く。しばらくして、

「ここはどこでございますえ。」とほろりと泣く。

七兵衛は笑えみかたむ傾むけ、

「旨うまいな、涙が出ればこつちのものだ、姉ねえや、ちつとは落着いたか、気が静まったか。」

「ここはどつちでしょう。」

「むむ、ここはな、むむ、」と独ひとりでほくほく。

「散々も気を揉もんでお前めえ、ようようこつちのものだと思つと、何を言つてもただもうわなわな震えるばかりで。弱らせ抜いたぜ。そつちから尋ねるようになれば占めたものだ。ここは佃町よ、八幡様の前を素直まっすぐに蓬莱橋を渡つて、広ッ場ばを越した処だ、可いいか、私わしは早船の船頭で七兵衛と謂いうのだ。」

「あの蓬莱橋を渡つて、おや、そう、」と考える。

「そうよ、知つてるか、姉ねえやは近所かい。」

「はい。……いいえ、」といつてフト口をつぐんだ。船頭は胸がで合あ点てんして、

「まあ、可いや、お前の許は構わねえ、お前の方にさえ分れば可いわ、佃町を知っているかい。」

ややあつて、

「あの、いつか通つた時、私くらいな年紀の、綺麗な姉さんが歩行いていなすつた、あすこなんでしょう、そうでございませうか。」

「待たツせよ、お前くらいな年紀で、と、こうと十六七だな。」

「はあ、」

「十六七の阿魔はいくらも居るが、綺麗な姉さんはあんまりねえぜ。」

「いいえ、いますよ、丸顔のね、髪の沢山ある、そして中形の浴衣を着て、赤い襦袢を着ていました、きつとですよ。」

「待ちねえよ、赤い襦袢と、それじゃあ、お勤が家に居る年明だろう、ありやお前もう三十くらいだ。」

「いいえ、若いんです。」

七兵衛天窓を搔いて、

「困らせるの、年月も分らず、日も分らず、さつぱり見当が着かねえが、」と頗る弱つた

らしかつたが、はたと膝を打って、

「ああああ居た居た、居たが何、ありや売物よ。」と言つたが、菊枝には分らなかつた。けれども記憶を確めて安心をしたものと見え、

「そう、」と謂つた声がうるんで、少し枕を動かすと、顔を仰向けにして、目を塞いだ。また涙ぐんだ。我に返れば、さまざまのこと、さまざまのことはただうら悲しきのみ、疑も恐もなくつて泣くのであつた。

髪も揺めき蒲団も震うばかりであるから、仔細は知らず、七兵衛はさこそとばかり、

「どうした、え、姉やどうした。」

問 慰めるとようよう此方を向いて、

「親方。」

「おお、」

「起きましようか。」

「何、起きる。」

「起きられますよ。」

「占めたな！ お前じつとしてる方が可いけれど、ちつとも構わねえけれど、起られるか、

遣つてみる一番、そうすりやしやんしやんだ。気さえ確たしかになりや、何お前案じるほどの容体じゃあねえんだぜ。」と、七兵衛は孫をつかまえて歩行あんよは上手の格で力をつける。

蒲団の外へは顔ばかり出していた、裾すそを少し動かしたが、白い指をちらりと夜具の襟へかけると、顔をかくして、

「私、……………」

浅緑

十二

「大事ねえ大事ねえ、水浸しになつていた衣服きものはお前めえあとの通り、聞かつせえ。」
時に絶えず音するは静しずかな台所の点滴したたりである。

「あんなものを巻着けておいた日にやあ、骨まで冷抜ひえぬいてしまうからよ、私わしが襦どん袍つくを枕ま許くらもとに置いてある、誰も居ねえから起きるならそこで引被ひっかけねえ。」

といったが克明な色面に顕れ、

「おお、そして何よ、憂慮をさつしやるな、どうもしねえ、何ともねえ、俺あ頸子にも手を触りやしねえ、胸を見な、不動様のお守札が乗つけてあら、そらの、ほうら、」

菊枝は嬉しそうに血の気のない顔に淋しい笑を含んだ。

「むむ、」と頷いたがうしろ向になつて、七兵衛は口を尖がらかして、鍋の底を下から見る。

屏風の上へ、肩のあたりが露れると、潮たれ髪はなお乾かず、動くに連れて柔かにつくりと傾くのを、軽く振つて、根を圧えて、

「これを着ましようかねえ。」

「洗濯をしたばかりだ、船虫は居ねえからよ。」

緋鹿子の上へ着たのを見て、

「待つせえ、あいにく襷がねえ、私がこの一張羅の三尺じやあ間に合うめえ！ と、可からう、合したものの上へ《し》めるんだ、濡れていても構うめえ、どっこいしょ。」

七兵衛はのような足つきで不行儀に突立つと屏風の前一跨、直に台所へ出ると、荒縄には秋の草のみだれ咲、小雨が降るかど霧かかつて、帯の端衣服の裾をしたした

と落つる雫も、萌黄の露、紫の露かと思えて、慄然とする朝寒。

真中に際立つて、袖も襟も萎えたように懸つてゐるのは、斧、琴、菊を中形に染めた、朝顔の秋のあわれ花も白地の浴衣である。

昨夜船で助けた際、菊枝は袷の上へこの浴衣を着て、その上に、菊五郎格子の件の帯上を結んでいたの。

謂は何かこれにこそと、七兵衛はその時から怪んで今も真前に目を着けたが、まさかこれに死神で、菊枝を水に導いたものとは思わなかつたであろう。

実際お縫は葛籠の中を探して驚いたのもこれ、眉を蹙めたのもこれがためであつた。斧と琴と菊模様の浴衣こそ菊枝をして身を殺さしめた怪しの衣、女が歌舞伎の舞台でしばしば姿を見て寢覚にも俯の忘れぬ、あこがるるばかり鬚眉の俳優、尾上橘之助が、白菊の辞世を読んだ時まで、寝返りもままならぬ、病の床に肌につけた記念なのである。

江崎のお縫は芳原の新造の女であるが、心懸がよくツて望んで看護婦になつたくらいだけれども、橘之助に附添つて嬉しくないことも無いのであつた。

しかるに重体の死に瀕した一日、橘之助が一輪ぎしに菊の花を活けたのを枕頭に引寄せて、かつてやんごとなき某侯爵夫人から領したという、浅緑と名のある名香を、

お縫の手で焚たいてもらい、天井つるから釣つるした氷ひょうのう囊とりのを取除けて、空気枕まに仰向けに寝た、素顔は舞台ふとんのそれよりも美しく、蒲団かいまきも搔ま巻まも真まつしろ白まな布まをもつて蔽おほえる中に、目のふちのやや蒼あおざめながら、額あおにかかる髪つやの艶つや、あわれうらわかき神まぼろしのまぼろしが梨園をを消えようとする時の風情。

十三

橘あか之助あかは垢あかの着あかかない綺麗な手を胸こに置いて、香こうの薰かおりを聞いていたが、一縷いちるの煙ふたすは二条じに細こく分われ、尖さきがささ波なみのようにひらひらと、靡なびいて枕かかに懸かつた時とき、白菊なごりの方に枕かかを返かへして横よこになつて、弱よわ々よわしゆう襟えりを左右さゆうに開ひらいたのを、どうなさいます？ とお縫ぬいが尋たずねると、勿な体たないが汗あせ臭くさいから焚たき占うめましよう、と病苦びやくの中に謂いつたという、香なごりの名残なごりを留とどめたのが、すなわちここに在ある記念かたみの浴衣ゆい。

懐ゆかししくも床ゆかしさに、お縫ぬいは死骸かたみの身まに絡まつた殊まにそれが肺結核つづらの患者かたみであつたのを、心得こころえある看護婦かたみでありながら、記念かたみにと謂いつて強つづらいて貰もらい受うけて来て葛籠つづらの底つづら深く秘ひめ置おいたが、菊枝きくえだがかねて橘きくえだ之助あか鼻びい屑せきで、番附ばんづきに記しした名なばかり見みても顔色かおいろを變かえる騒さわぎを知しつてた

ので、昨夜、不動様の参詣さんげいの帰りがけ、年紀とし下ながら仲よしの、姉さんお内かい、と寄った折も、何は差置き橘之助うわさの噂、お縫は見たままを手に取るよう。

これこれこう、こういう浴衣と葛籠の底から取出すと、まあ姉さんと進むる膝、灯あかりとともに乗出す膝を、突合した上へ乗せ合つて、その時はこういう風、仏におなりの前だから、優しいばかりか、目許めもと口付、品があつて気高うてと、お縫が謂えば、ちらちらと、白菊の花、香の煙。

話が嵩こもじて理に落ちて、身に沁しみみて涙になると、お縫はさすがに心着いて、鮎すしを驕おごりましょうといつて戸外おもてへ出たのが、葦あしの湯の騒さわぎをつい見棄てかねて取合つて、時をうつしていた間に、過世すくせの深い縁であろう、浅緑の薫かほのなお失うせやらぬ橘之助の浴衣を身につけて、跣足はだしで、亡き人のあとを追つた。

菊枝は屏風の中から、ぬれ浴衣を見てうっとりしている。

七兵衛はさりとも知らず、

「どうじゃメ《し》めるものはこの扱帯しごきが可いいかの。」

じつと凝視みつめたまま、

だんまりなり。

「ぐるぐる巻まきにすると可い、どうだ。」

「はい取つて下さいまし、」とやつといったが、世馴よなれず、両親ふたおやには甘やかされたり、大恩人に対し遠慮の無さ。

七兵衛はそれを莞爾にこやかに、

「そら、こいつあ単衣ひとえだ、もう雫しずくの垂るようなことはねえ。」

やがて、つくづくと見て苦笑い、

「ほほう生れかわつて娑婆しやばへ出たから、争われねえ、島田の姉さんがむつきにくるまつた形なりになった、はははは、縫上げをするように腕をこうぐいと遣やらかすだ、そう、そうだ、そこで坐つた、と、何ともないか。」

「ここが痛うございますよ。」と両手を組違えに二の腕をおさえて、頭つむりが重そうに差俯さしうつ向むく。

「むむ、そうかも知れねえ、昨夜ゆうべそうやつてしつかり胸を抱いて死んでたもの。ちようど痛むのは手の下になつてた処よ。」

「そうでございますか、あの私はこうやつて一生懸命に死にましたわ。」

「この女こは！ 一生懸命に身を投げる奴やつがあるものか、串じょうだん戯ぢやあねえ、そして、ど

んな心持だった。」

「あの沈みますと、ぼんやりして、すつと浮いたんですわ、その時にこうやって少し足を縮めましたっけ、また沈みました、それから知りませんよ。」

「やれやれ苦しかったろう。」

「いいえ、泣きとうございました。」

記念ながら

十四

二ツ三ツ話の口が開けると老功の七兵衛ちつとも透さず、

「何しろ娑婆へ帰ってまず目出度、そこで嬰兒は名は何と謂う、お花か、お梅か、それとも。」

「ええ、」といいかけて菊枝は急に黙ってしまった。

様子を見て、七兵衛は氣を替えて、

「可いや、まあそんなことは。ところで、粥が出来たが一杯どうじや、またぐつと力が着くぜ。」

「何にも喰べられやしませんわ。」と膠の無い返事をして、菊枝は何か思出してまた濟然とするのである。

「それも可いよ。はは、何か謂われると氣に障つて煩いな？ 可いや、可いやお前になつてみりや、盆も正月も一斉じや、無理はねえ。」

それでは御免蒙つて、私は一膳遣附けるぜ。鍋の底はじりじりいう、昨夜から氣を揉んで酒の虫は揉殺したが、矢鱈無性に腹が空いた。「と立ったり、居たり、歩行いたり、果は胡坐かいて能代の膳の低いのを、毛脛へ引挟むがごとくにして、紫蘇の実に糖蝦の塩辛、畳み鯛を小皿にならべて菜ツ葉の漬物堆く、白々と立つ粥の湯氣の中に、真赤な顔をして、熱いのを、大きな五郎八茶碗でさらさらと掻食つて、掻食いつつ菊枝が支えかねたらしく夜具に額をあてながら、時々吐息を深くするのを、茶碗の上から流眇に密と見ぬように見て釣込まれて肩で呼吸。

思出したように急がしく掻込んで、手拭の端でへの字に皺を刻んだ口の端をぐいと拭

き、差置いた箸も持直さず、腕を組んで傾いていたが、台所を見れば引窓から、門口を見れば戸の透から、早や九時十時の日ざしである。このあたりこそ氣勢もせぬが、広場一ツ越して川端へ出れば、船の行交い、人通り、烟突の煙、木場の景色、遠くは永代、新大橋、隅田川の模様なども、同一時刻の同一頃が、親仁の胸に描かれた。

「姉や、姉や、」と改めて呼びかけて、わずかに身を動かす背に手を置き、

「道理じゃ、善いにしろ、悪いにしろ、死のうとまで思つて、一旦水の中で引取つたほどの昨夜の今じゃ、何か話しかけられても、胸へ落着かねえでかえつて頭痛でもしちやあ悪いや、な。だから私あ何にも謂わねえ。」

一体昨夜お前を助けた時、直ぐ騒ぎ立てればよ、汐見橋の際には交番もあるし、そうすりや助けようと思う念は届くしこつちの手は抜けるといふもんだし、それに上を越すことは無かつたが、いやいやそうでねえ、川へ落ちたか落されたかそれとも身を投げたか、よく見れば様子で知らあ、お前は覚悟をしたものだ。

覚悟をするには仔細があるう、幸いことか悲しいことか、そこん処は分らねえが、死のうとまでしたものを、私が騒ぎ立って、江戸中知れ渡つて、捕つちやあならねえものに捕るか、会つちやあならねえものに会つたりすりや、余計な苦患をさせるようなものだ。」

七兵衛は口軽に、

「とこう思つての、密そつと負おぶつて来て届かねえ介抱かいぼうをしてみたが、いや半間はんまな手が届いたのもお前めえの運うんよ、こりや天道てんとうさま様のお情なさけというもんじや、無駄むだにしては相済あひままぬ。必ずかならず軽かる忽ずみなことをすまいぞ、むむ姉あねや、見りや両ふた親おやも居ゐなさろうと思われら、まあよく考えかんがてみさつせえ。

そこで胸を静めてじつと腹を落着けて考えるに、私わしが傍そばに居ては氣を取られてよくあるめえ、直ぐにこれから仕事に出て、蝸まい牛まいの殻かをあけるだ。可よしか、棧敷さじきは一日貸切かだぜ。」

十五

「起きようと寝ようと勝手次第まんなま、お飯まんまを食べるなら、冷飯おひやがあるから茶漬ちぢにしてやらつせえ、水みづを一手桶ておけ汲くんであら、可いいか、そしてまあ緩ゆる々くと思案しあんをするだ。

思案しあんをするじやが、短氣たんきな方かたへ向むくめえよ、後生ごせいだから一番方角一番を暗劍殺あんけんころしに取違ちがえねえようにの、何とか分別ぶんべつをつけさつせえ。

幸^{しあわせ}福と親御の処へなりまた伯父御叔母御の処へなり、帰るような気になつたら、私^{わし}に辞儀も挨拶^{あいさつ}もいらねえからさつさと帰りねえ、お前^{めえ}が知^しつてるといふ蓬萊橋は、広場^{ひろつば}を抜けると大きな松の木と柳の木が川ぶちにある、その間から斜^{はすかい}向に向うに見えらあ、可^かいかい。

また居^いようと思^{おも}うなら振^{ふり}方^{かた}を考^{かんが}えるまで二日でも三日でも居^いさせえ、私^{わし}ん処^{ところ}はちつとも案^{あん}ずることはねえんだから。

その内に思^{おも}案^{あん}して、明^{あか}して相談^{あひだん}をして可^かいと思^{おも}つたら、謂^いつて見^みさせえ、この皺^{しわ}面^{めん}あ突^つ出して成^なることなら素^そツ首^{くび}は要^いらねえよ。

私^{わし}あしみじみ可愛^{かわい}くつてならねえわ。

それから、ここに居^いる分にやあうつかり外^{ぐわい}へ出^でめえよ、実は、」

と声^{こゑ}を密^{ひそ}めながら、

「ここにいらは廓^{くわく}外^{ぐわい}で、お物見^{ものみ}下^{した}のような処^{ところ}だから、いや遣^{やり}手^てだわ、新^{しん}造^{ぞう}だわ、その妹^{いもうと}だわ、破^{やぶ}落^{らく}戸^この兄^{あに}貴^きだわ、口^{くち}入^{いれ}宿^{やど}だわ、慶^{けい}庵^{あん}だわ、中^{なか}にやあお前^{めえ}勾^{かど}引^ひをしかねえよ、よ^ような奴^{やつ}等^らが出^で入^{いり}をすることがあるからの、飛^とんでもねえ口^{くち}に乗^のせられたり、猿^{さる}轡^{ぐつわ}を嵌^はめられたりすると大^{だい}変^{へん}だ。

それだからこうやって、夜夜中よなか開放あけつばなしの門も閉めておく、分ったかい。家うちへ帰るならさっさと帰らっせえよ、俺わしにかけかまいはちつともねえ。じゃあ、俺は出懸けるぜ、手足のぼを伸して、思うさま考えな。」

と返事は強いないので、七兵衛はずいと立って、七輪の前へ来ると、蹲しゃがんで、力なげに一服吸って三服目をはたいた、駄だろく六張はりの真しんちゆう鍬くわの煙管きせるの雁首がんくびをかえして、突ついて火を寄せて、二ツ提さげの煙草たばこ入いれにコツンと指し、手拭てぬぐいと一所にぐいと三尺に挟んで立上り、つかつかと出て、まだ雪しゆくの止やまぬ、びしよ濡ぬれの衣を振返かえって、憂慮きづかわしげに土間に下りて、草履つを突つかけたが、立たちよど淀んで、やがて、その手拭を取とって頬ほお被かぶり。七兵衛は勝手の戸をがらりと開けた、台所は昼になつて、ただ見れば、裏手は一面の蘆原あしはら、処々に水溜たまり、これには昼の月も映りそうに秋の空は澄切すみつて、赤蜻蛉あかとんぼが一ツ行き二ツ行き、遠方おちかたに小さく、釣つりをする人のうしろに、ちらちらと帆が見えて海から吹通しの風颯さつと、濡れた衣きぬの色を乱そだして記念かたみの浴衣は揺ゆらめいた。親仁はうしろへ伸上のびあつて、そのまま出ようとする海苔のり粗朶そだの垣根もとの許もとに、一本二本咲きおくれた嫁菜の花、葦あしも枯れたにこはあわれと、じつと見る時、菊枝は声を上げてわつと泣いた。

「妙法蓮華經如来寿量品第十六自我得仏来所經諸劫數無量百千萬億載阿僧祇。」

川下の方から寂として聞えて来る、あたりの人の氣勢もなく、家々の灯も漏れず、流は一面、岸の柳の枝を洗つてざぶりざぶりと言する中へ、菊枝は両親に許されて、髪も結い、衣服もわざと同一扮で、お縫が附添い、身を投げたのはここからという蓬萊橋から、記念の浴衣を供養した。七日経つてちようど橘之助が命日のことであつた。

「菊ちゃん、」

「姉さん、」

二人は顔を見合せたが、涙ながらに手を合せて、捧げ持つて、

「南無阿弥陀仏、」

「南無阿弥陀仏。」

折から洲崎のどの楼ぞ、二階よりか三階よりか、海へ颯と打込む太鼓。

浴衣は静に流れたのである。

菊枝は活々とした女になつたが、以前から身に添えていた、菊五郎格子の帯揚に入れた写真が一枚、それに朋輩の女から、橘之助の病氣見舞を紅筆で書いて寄越したふみ

とは、その名の菊の枝に結んで、今年は^{はたち}二十。

明治三十三（一九〇〇）年十一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成³」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第六卷」岩波書店

1941（昭和16）年11月10日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：染川隆俊

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

葛飾砂子

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>